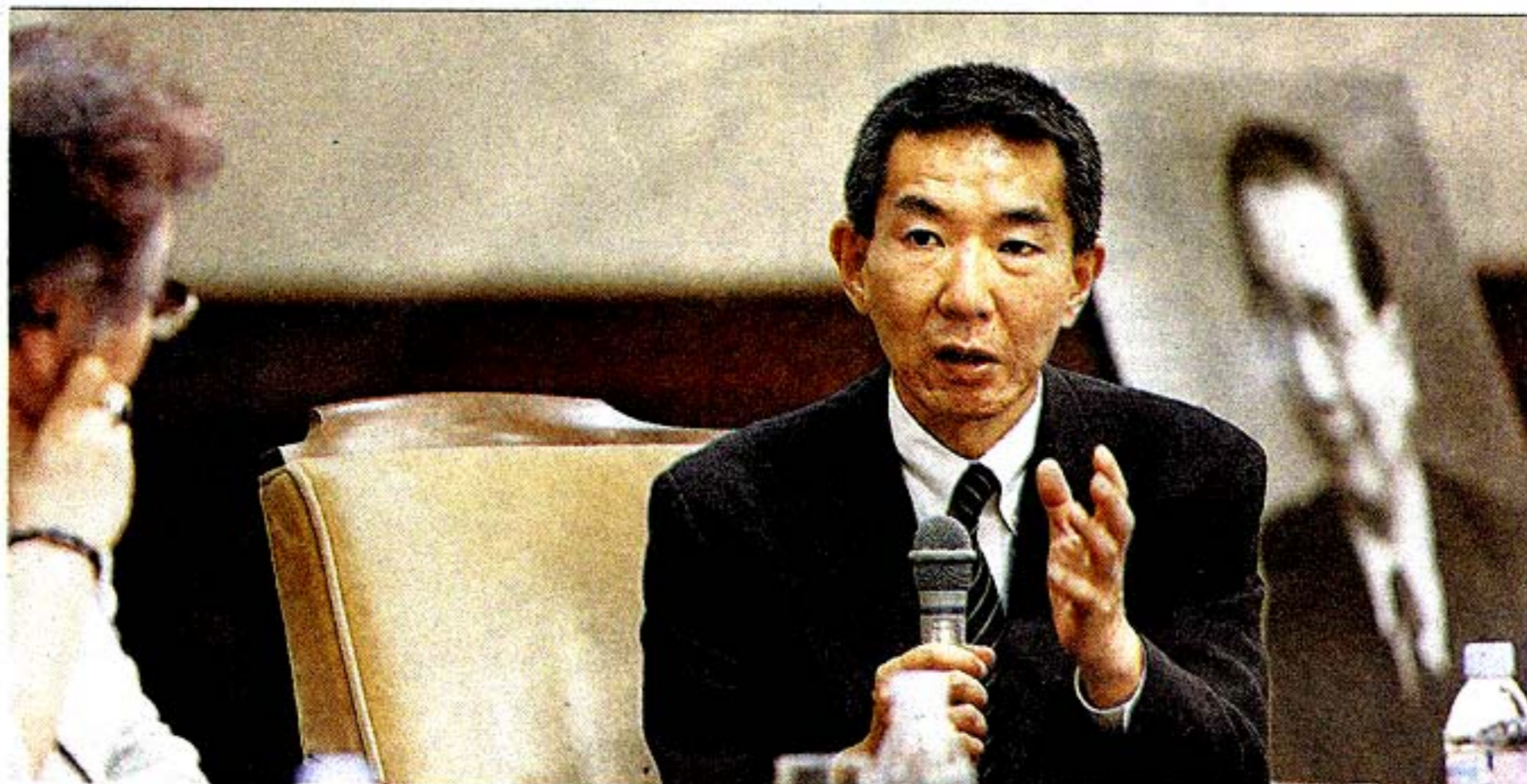


ひと

祖父・豊彦の実績を語り始めたグラフィックデザイナー

かがわ とくあき
賀川 督明 さん(56)



「自分さえよければいい、という人があふれる今の社会は、もう限界にきている」

祖父でノーベル平和賞、文学賞の候補にもなった社会運動家、賀川豊彦の写真を背にそう語った。豊彦が神戸に当時あったスラム街に移り住んで貧民救済活動を始めたのは、ちょうど100年前。7月に神戸で開

かれた記念シンポジウムにパネリストとして登壇し、格差社会のいま、豊彦の思想が求められると説いた。

東京出身。6歳の時に逝った祖父は家庭を顧みず活動し、病に伏せつた最晩年の記憶しかない。父は豊彦の敷いたレールを進まず、写譜や作曲をする音楽家になった。自身は、周囲の豊彦の孫への期待感に反発し、思春期はバイクで暴走、家出もした。大学は中退し、独学でグラフィックデザインを身につけた。

40代になり、フリーとして自信を深め、祖父の生き方を素直に見られるように。戦前のベストセラーで復刻された自伝小説「死線を越えて」は「思っていた通り、人の痛みに寄り添う豊彦像が描かれている」。

これまで孫として公の場に出ることを避けてきたが、年内は日本生活協同組合連合会など豊彦が創設に尽力した団体と力を合わせ、その業績を語る考えだ。来春、建て替え後の神戸の賀川記念館館長に就く。「成長への限界が見え、持続可能な社会を目指そう、というこの時代、豊彦のメッセージを響かせたい。ともに生きよう、というね」